

Eliane Pagels, *Adam, Eve, and Serpent*

その1: 序説

2009年度大学院講義 後期

鈴木繁夫

動機と関連

1. 性に対する考え方が20世紀後半に突如変化
2. 人間のあり方や振る舞いに対する考え方の変化となる。
3. 特にキリスト教徒にとっては、人間性の枠組みについて再考を迫る。
4. そもそも従来の性に対する考え方は「自然」（当為必然）ではなく、キリスト教が過激な信仰教団から正統信仰として確立する1世紀～4世紀に形成されたもの。
5. キリスト教の性に対する考え方は教団ないに元からあったものではない。
6. キリスト教の性に対する考え方は異教とユダヤ教からの離別を象徴するもの。

初期キリスト教

- (1)性的抑制が美德。
- (2)一夫多妻および離婚（←ユダヤ教容認）を忌避。
- (3)婚外性交渉（←異教容認）を忌避。
- (4)夫婦間の性交渉は快樂のためでなく生殖のため。
- (5)独身の優位
- (6)性欲が湧くのは原罪の印

ローマの性

- (1) 売買春の法制化
- (2) 離婚容認
- (3) 同性関係の容認
- (4) 間引き・捨て子の容認

女性の地位

- 女性の側からの離婚は原則不可
- 男性側からの離婚
 - 子を産まない場合に可（230-31B.C.）
 - 社会的地位の向上
 - 不倫（姦淫）への厳罰化（ユリア法 18B.C）
- 妻は家庭、夫はフォーラム
- 心の交わりは想定外←少年愛が想定内
 - レスビアンの実体は不明

身体への力への感覚

- 身体への力＝暗黒と絶望
 - 剣闘士の宣言
 - 「我々は、居所のないこの世に生まれついている」
 - ←→ギリシア：訓練した身体への信頼
- 欲望にたいする恐怖
 - 欲望**： 社会慣習への抗い＋階層秩序の分解＋
分類の混乱＋混沌の爆発
 - ↑
 - キリスト教徒：欲望は魂を穢す

ローマのキリスト教徒

- 改宗により身体の欲望が消滅
 - 肉の重さが軽くなる
 - ∴ 非物質の高次権力(神)と合一化する
 - 「目の肉」→この世への執着を増幅
 - 神の光は人間の目を盲目にし、真の世界をみせる
- キリスト教徒のユダヤ化と非ユダヤ化
 - 当初はこの世を遍歴する
 - やがて「教会」という場所への執着

キリスト教の性

- (1)創造譚（創世記1-3章）が性を語る場所（locus）
- (2)人間性そのものの定義の場→アメリカ独立宣言にも生きている。
- (3)創造譚とは、それを背負う社会の価値観や宗教の世界観を示している。

本書の目的

- (1) 創造譚への初期キリスト教のさまざまな解釈→現在の価値観が歴史上の産物だと相対化できる→(多文化主義 cultural-pluralism vs. 文化多元主義 multi-culturalism)
- (2) 創造譚を利用して、初期キリスト教が教義の正当性を証明しようとした。→集団のlegitimacy: 経典に求めるvs. 啓示・体験に求める
- (3) 創造譚を利用して、初期キリスト教が信徒の振るまいの正当性を証明しようとした。→世界の意味を教え、それにふさわしい行動をする体験系宗教
- (4) 「キリスト教が異教と類似している」という20世紀のキリスト教相対化とは違う
- (5) 異教とは異なった「キリスト教社会の特異性」(テルトゥリアーヌス)を洗い出す→護教論 apologetics

第1章：アダムとエバ

- (1)ユダヤ教：①公で裸はダメ ②結婚の目的は生殖
- (2)キリスト教（新約聖書）：①離婚を否定 ②結婚を否定 ③結婚は売買春の予防手段 ④女性は教会内でヴェールをかぶる
- (3)初期キリスト教：①上記②-③の解釈を巡る論争 ②女性を家庭内に止め父権的社会構造 ③原罪は肉欲にかかわるものではなく、人間の自由意志と責任にかかわるもの

第2章：創造譚と地上権威への服従

- (1) キリスト教徒の迫害(←Domine Quo Vadis?)
- (2)人間を創造した神にのみ従順obedience ≠ 上位権力への忠誠allegiance
- (3)人間は皆、神の似姿である→皇帝崇拝を否定
- (4)人間は根源的に自由であり、その生命はかけがえのないもの
- (5)神の善とこの世の苦しみ←神義論theodicy

第3章：グノーシス主義

- (1)創造譚は文字通りではなく象徴として読む
→symbology
- 例①蛇はキリスト自身（人間に敵対的な造物主への挑戦）という物語
- 例②墮落した魂が靈的な自己を発見するという物語
- (2)人間の自由意志には誤りや苦しみを避ける力はない
- (5)洗礼によって罪・苦しみからは自由になれない→啓示への徹底化
- (6)正統信仰の側からのグノーシスへの反対

第4章：禁欲主義→ascetic theology修徳神学

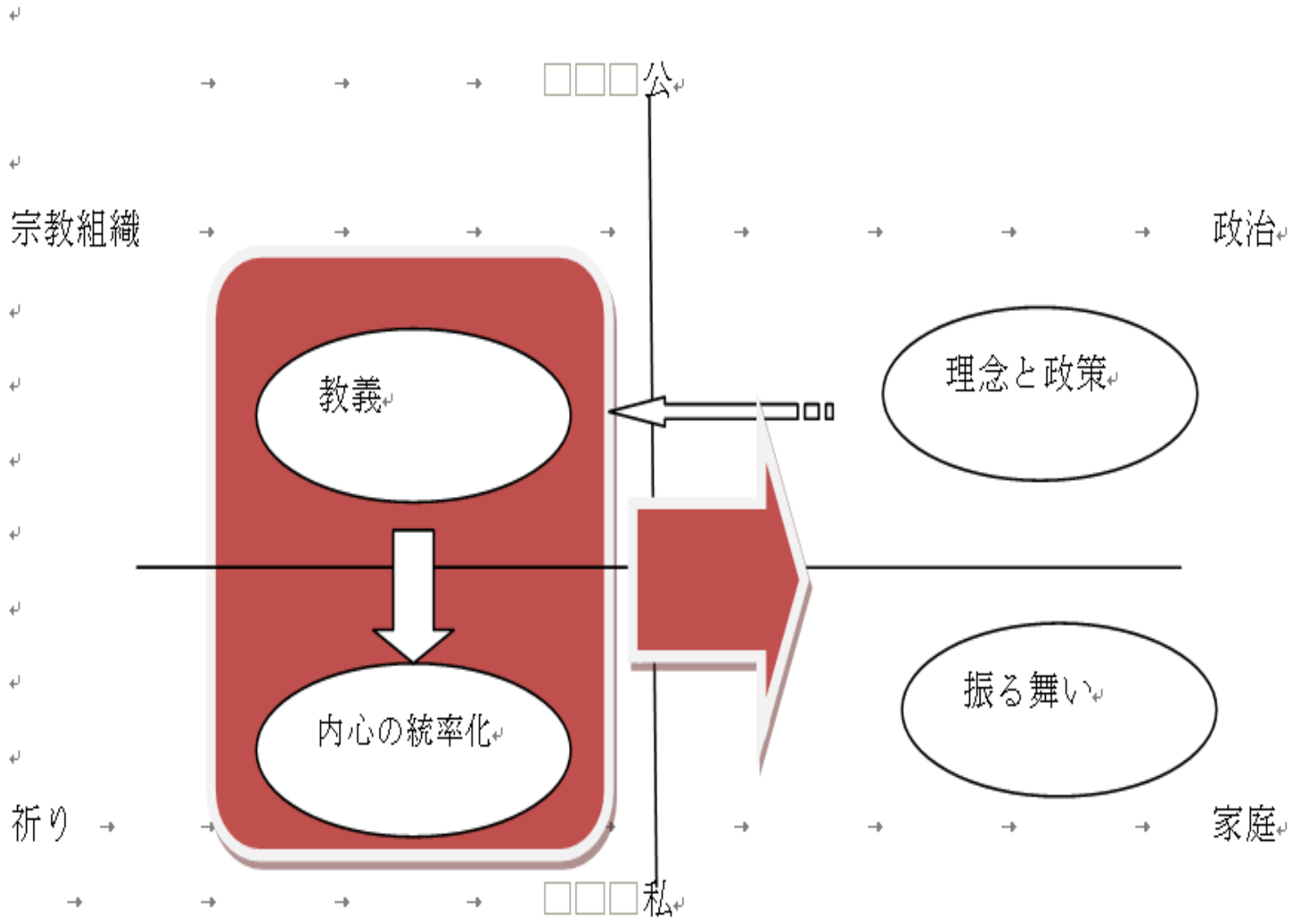
- (1)清貧と独身によるこの世の棄却
- (2)アダムとエバには墮落前に性交渉はなかった→非性交による生殖
- (3)ヒエローニウムス、アンブロシウス、アウグスティヌスvs. ヨウィニアーヌス
- (4) ヨウィニアーヌス ①洗礼の恩寵を強調 ②洗礼を受けた信徒の平等③断食の無意味性④処女降誕・聖母の処女性への疑義
- (5)女性信徒が禁欲主義に走る

第5章：自由

- (1)人間は自己を統治しうる：自由意志、悪魔からの自由、社会拘束からの自由、性的拘束からの自由、専制権力からの自由、運命からの自由
- (2)313年キリスト教公認：信仰が保証される
- (3)アウグスティヌスによる性的墮落論
- (4)従来：①創造とともにアダムには道徳的自由意志が備えられた ②アダムが自由意志を誤用 ③死が人間一般にもたらされる
- (5)アウグスティヌス：④性的体験が腐敗する ⑤政治からの自由も奪われた
- (6)統治権力によるアウグスティヌス利用：帝国と教会組織との共同
- (7)当時はアウグスティヌス解釈への反対論が多くあった。
論敵：エクラヌムのユリアーヌス→人間の自由意識と責任を強調

本書への反論：教義と実践

- (1)宗教上の観念と現実の実践事項とは順接にならない←道德神学moral theology
- ×(2)政治的理由が最初にあって、宗教上の観念を利用する→十字軍。第二次イラク侵攻
- ○(3)宗教観念・道德選択【内面】は、現実の観念と現実の振る舞い【外面】と一致する。
- (4) exegesis(新たなメッセージをテキストから読み出すこと)と eisegesis (主体の意図をテキストの中に読み込むこと)とは異なっているようで、同じ運動
- (5)ペイゲルス：フーコー（≠文化人類学者）を誤読している。
 - ①「時代政治状況や宗教観念によって人間の思考形態は左右される」とは、フーコーはしていない。
 - ②「テキストを本当に解釈するには読者は積極的に創造的にテキストと格闘し、その途上において過去の死んだ文字は生き返る」ともしていない。



受講者課題

- 内田樹『寝ながら学べる構造主義』第三章1および6を読み、ペイゲルスの誤読の意義を400字以内にまとめよ。